

## 20 世紀初頭フェルガナ地方におけるクルグズ遊牧民の農耕

植田 暁

本報告は、現在のウズベキスタン東部及びクルグズスタン南部にあたるフェルガナ地方における 20 世紀初頭の経済的変容を、遊牧民による農業という視点から解明することを目的とする。フェルガナ地方の経済史研究の対象は従来、定住の綿花地域に偏っていた。本報告の特色は、GIS（地理情報システム）を用いた定量的分析の手法を導入し、フェルガナ地方のクルグズ遊牧民が帝政ロシア支配期における中央アジア経済の変動にどのように対応したのかを、非灌漑農耕の拡大に注目することによって明らかにしたことにある。

本報告で考察対象とする「遊牧民」とは、帝政ロシア支配期の行政上のカテゴリーである。実際は定住の生活を送っていた「遊牧民」も存在しており、その逆の状況も見られた。彼らの生業の実態をユーラシアの他の遊牧集団と比較すると、その生業全体における遊牧の比重は比較的小さかったが、冬営地と夏営地を有し季節的移動を行っていた牧畜集団であったことは確認できる。本報告では以上を踏まえ、帝政ロシア植民地当局の認識したクルグズの特定の集団という意味で、遊牧民という語を使用する。

前半では、GIS を用いて統計資料と地理情報を活用し、フェルガナ地方の諸集団の生業についての分析を示した。具体的には、村落毎の作物別種面積情報を含む 1897-1899 年の土地税に関する資料と民族籍情報を含む 1917 年センサスを約 2000 件の村落レベルで照合し、農業の特徴と民族籍の対応を示した。さらに、そのデータを従来詳細が明らかでなかった郷レベルの位置情報、帝政ロシア支配期の灌漑状況と対応させ、農業、民族、地形、灌漑の相関を定量的に明らかにした。

以上の GIS 分析と、当時の調査記録、旅行記等の文献史料を整理することによって、フェルガナ地方の主要な民族集団であった、サルト、ウズベク、キプチャク、タジク、クルグズの五つの集団の 1900 年頃の状況について、以下の点を明らかにした。サルト、ウズベク、キプチャクは 19 世紀以前の技術で灌漑可能な好条件の土地を占有することで、綿花生産拡大の担い手となっていた。ウズベクの多くはコーカンド市を中心とするソフ川扇状地に居住し、最良の灌漑農地を占有して、諸集団の中で最も綿花栽培に特化していた。その背景には、

ウズベクがコーカンド・ハン国の支配集団であったという歴史的背景があったと考えられる。耕地の灌漑率が低い周縁の山麓部に分布するタジクとクルグズは、穀物生産に重心を置いた農業を行っていた。

後半では、フェルガナ地方の周縁山麓地帯に分布していたクルグズ遊牧民の生業、特に農業についての分析を行った。

前提として、1911-1913年に実施された当局による調査の報告書『クルグズ遊牧民の土地利用に関する資料 Материалы по киргизскому землепользованию』を主要史料として、クルグズの遊牧の具体的特徴を示した。クルグズが冬季の雪中放牧技術を始めとした、高度な遊牧技術を有していたこと、ロシア系入植農民の出現に先立って、草刈り、干草の利用、厩舎の建設といった牧畜技術の採用を行っていたことを明らかにした。

そして、本報告の中心的課題であるクルグズ遊牧民の農耕について検討した。引き続き1911-1913年の調査報告書を中心史料とし、帝政ロシア支配初期の旅行記史料とも比較を行い、帝政ロシア支配期を通じた農耕の変化を分析した。

その結果、フェルガナ地方のクルグズ遊牧民は、比較的小規模な遊牧、非灌漑地を中心とした自給的な農業、様々な商業、手工業を組み合わせた複合的生業形態を取っていたことを明らかにした。クルグズ遊牧民は、春小麦を中心とした非灌漑農耕を軸とすることで、遊牧の年間サイクルと彼らの地理的分布に適応した独自の農耕形態を作り出し、食用の穀物をほぼ自給していた。

調査報告書、統計資料、旅行記等文献史料の分析から、クルグズ遊牧民の非灌漑農業は帝政ロシア支配期（1876年～1910年頃）に拡大したことを示した。その要因を史料より以下のように推測した。①ヨーロッパロシアの綿花需要によってウズベク、サルト人地域が綿花モノカルチャー化したことで、フェルガナ地方の穀物価格が高騰したが、綿花による現金収入を得られないクルグズ遊牧民は、ヨーロッパロシアやシベリアからの移入穀物が購入できなかった。②しかし、他集団の入植や支配等によって、遊牧の拡大による収入増加は困難となっていた。③そのため、フェルガナ地方のクルグズ遊牧民は、自らの食糧自給を確保するために非灌漑穀物栽培を拡大した。

フェルガナ地方のクルグズ遊牧民による非灌漑農耕の拡大は、遊牧と農耕を両立させる複合的生業形態を可能とした。本報告が復元した遊牧民の農耕化を、ソ連史学のように、遊牧から農耕への一次元的な移行の過程として理解することは不適切である。遊牧民の農耕化は、その形態によっては、むしろ遊牧の部分的継続に寄与するものであった。帝政ロシア支配期、独自の経済的適応を行ったフェルガナ地方のクルグズ遊牧民がその後の革命期・内戦期の状況にどのように対応していったのかの解明が今後の課題である。

(東京大学大学院修士課程)